第１学年　国語科（現代の国語）学習指導案

日　　時：令和 5 年 10 月 3 日（火）
6 限　14:20～15:10
学 校 名：東京学芸大学附属高等学校
対　　象：第 1 学年 G 組　40 名
指導教諭：若宮 知佐　先生
授 業 者：板垣 光樹

１．単元名　具体例から抽象的な考えを読み取ろう―言語観の変容（メタモルフォーゼ）―

２．教材名　「ことばとは何か」（筑摩書房　現代の国語）

３．単元の目標

○具体的な個別の情報と一般的な情報との関係について理解するとともに、名づけることで事物がはじめて存在するという言語観について理解を深めることができる。【知識及び技能　⑵イ】

○自分の考えを伝えるために必要な情報を様々な観点から収集・整理するとともに、話の構成や展開を工夫して自分の考えを的確に表現することができる。【思考力、判断力、表現力等　A話すこと・聞くこと⑴イ】

○評論文という文章の種類を踏まえて、文章の内容や構成、主題などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握することができる。【思考力、判断力、表現力等　C読むこと⑴ア】

○進んで文章を読み、伝統的な言語観やソシュールの言語観について批判的に検討して自身の言語観を問い直すことを通して、現代社会を生きる人間としての自覚をもち、ことばを通して他者や社会に関わろうとすることができる。【学びに向かう力・人間性等】

４．単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現 A　話すこと・聞くこと C　読むこと	主体的に学習に取り組む態度
【⑵ 情報の扱い方に関する事項　イ】 具体的な個別の情報と一般的な情報との関係について理解するとともに、名づけることで事物がはじめて存在するという言語観について理解を深めている。	【A　話すこと・聞くこと　イ】 自分の考えを伝えるために必要な情報を様々な観点から収集・整理するとともに、話の構成や展開を工夫して自分の考えを的確に伝えている。 【C　読むこと　ア】 評論文という文章の種類を踏まえて、文章の内容や構成、主題などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。	進んで文章を読み、伝統的な言語観やソシュールの言語観について批判的に検討して自身の言語観を問い直すことを通して、現代社会を生きる人間としての自覚をもち、ことばを通して他者や社会に関わろうとしている。

５．生徒観

本学級の生徒は、文章を読んで感じたことや考えたことについて積極的に発言しようとする傾向が見られる。高校に入学してから言語を中心に取り上げた教材文は読んでおらず、「ことばとは何か」が「ことば」と「もの」の関係性や自らの言語観について考える初めての教材となる。

1 学期に学習した「デジタル社会」では、18 世紀末にベンサムが構想しM・フーコーが『監獄の誕生』において言及した一望監視施設「パノプティコン」と、それを応用してM・ポスターが情報通信テクノロジー下の人々の意識を表すのに用いた「超パノプティコン」、さらにはW・ボガードが現代のデジタル情報技術が進展した結果として相互的な監視が可能になった状況を指すのに用いた「ポスト・パノプティコン」の 3 つの概念に触れて、情報の脱物質化によってあらゆる情報が蓄積されるようになったことや、情報の蓄積が可能になったことで遍在する個人の情報を集めた上でそれを〈遡る〉強力な監視社会が誕生したことを学習した。M・フーコーは構造主義の流れを批判的に継承したポスト構造主義を代表する思想家の一人であり、生徒には哲学を理解する土台が形成されつつある。また、「デジタル社会」の本文は、従来の社会とデジタル社会との対比関係をつかむことで筆者の主張や文章構成が理解しやすい文章であった。本単元では、ソシュールの言語観に触れることで哲学に親しみ理解を深めるとともに、文章の内容や構成等について具体例に即して把握する能力を身に付けさせたい。

また、「魔術化する現代技術」では、呪術や魔術と科学技術を対比させて科学技術の発展と高度化が社会にもたらした影響や、現代社会において科学は魔術化されうるということを学習した。科学と魔術という相反する分野を対比的に論じた文章を読むことを通して、生徒は論の構造を理解する能力を身に付けつつある。そこで、本単元では対比や具体例、比喩といった文章表現を把握するための知恵を活用して、ギリシャ以来の伝統的な言語観とソシュールの言語観の相違点や、ことばによって分節することによって「もの」の観念が私たちの思考の中に存在するようになるという筆者の主張を読み取る力の育成を目指していく。

６．教材観

（１）出典について

本単元で扱う教材「ことばとは何か」は、内田樹『寝ながら学べる構造主義』（文春新書　2002 年）に拠る。同書は、著者が神戸市で行った市民講座の講義ノートをもとにしており、フェルディナン・ド・ソシュールやミシェル・フーコー、ロラン・バルトなどが唱えた構造主義の思想を平易に解説した構想主義の入門書である。「ことばとは何か」は、ギリシャ以来の伝統的な言語観とソシュールの言語観を対比する形式で「ことば」と「もの」が同時に誕生することを述べる内容であり、教科書本文は第二章「始祖登場―ソシュールと『一般言語学講義』」の「Ⅰ　ことばは『ものの名前』ではない」に収められている。

「ことばとは何か」は、平成 21 年告示学習指導要領下においては、共通必履修課目の「国語総合」の教科書として筑摩書房が発行した「精選 国語総合　現代文編　改訂版」の中に採録されていた。「現代の国語」の教科書本文との間に異同は見られないが、「国語総合」の教科書にはなかったソシュールの肖像や星雲の画像が「現代の国語」の教科書には掲載されている。

（２）著者について

内田樹は、1950 年 9 月 30 日に東京都大田区に生まれた。1966 年に東京都立日比谷高等学校へ入学するが、1968 年に品行不良を理由に退学する。同年大学入学資格検定に合格し、1969 年に東京大学教養学部文科Ⅲ類へ入学する。1975 年に東京大学文学部フランス文学科を卒業後、1977 年に東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程（フランス文学専攻）に入学し、修士論文ではフランスの哲学者モーリス・ブランショに関する研究に取り組んだ。1980 年に東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程に入学し、在学中にエマニュエル・レヴィナス著『困難の自由』を読んでレヴィナスの名前を知り、以後レヴィナスの研究に打ち込む。1982 年に博士課程を中退し、東京都立大学人文学部助手（フランス文学専攻）となる。1985 年に『困難の自由』の訳書を

国文社から刊行し、1987 年にレヴィナスと面会する。1990 年に神戸女学院大学文学部総合文化学科助教授となり、同大学教授を経て 2011 年に退職し、同大学名誉教授を務める。

2001 年に初めての単著『ためらいの倫理学』（冬弓舎　2001 年）を刊行して以来、レヴィナスをはじめとするフランス現代思想に関する解説やエッセイを多く執筆している。映画論や武道論にも関心があり、合気道七段、居合道三段、杖道三段の有段者である。ブログ「内田樹の研究室」を主宰し、多方面から幅広いテーマについて情報発信を行っている。『私家版・ユダヤ文化論』（文春新書　2006 年）で第 6 回小林秀雄賞、『日本辺境論』（新潮新書　2009 年）で第 6 回新書大賞を受賞している。

（3）教科書本文について

「ことばとは何か」は、ギリシャ以来の伝統的な言語観（名称目録的言語観・カタログ言語観）とソシュールの言語観という異なる 2 つの言語観を取り上げて、「ことば」と「もの」は同時に誕生するということ、すなわち名づけられることによって「もの」がはじめてその意味を確定して実在することについて理解を深めることを目指した評論である。評論文は、文章の主題に関して筆者が立てた問い（問題提起）について、具体例を挙げたり仮説や反論を立てたりすることによって論証する過程を経て、問いに対する答え（結論）を提示するのが基本的な構成である。主な論証の型としては、帰納法や演繹法、弁証法などが挙げられる。このうち、「ことばとは何か」では、個別の具体的な事柄から一般的な考えを導き出す帰納法に基づく論証形式が用いられている。このような特徴を踏まえて、本単元では具体例からそれが説明している抽象的な考えを読み取ることを学習活動の中核に据える。

伝統的な言語観とは、「もの」の名前は人間が勝手につけたという考えを基本とし、ことばとは「ものの名前」であると見なす言語観である。本文中で「名称目録的言語観」や「カタログ言語観」などと呼ばれているこの言語観では、まず「もの」が存在し、人間があとからつけた名前がことばだと考える。内田樹は、伝統的な言語観における「名づけられる前からすでにものはあった。」（31 ページ 12～13 行目）という前提に対して「『まだ名前を持たない』で、アダムに名前をつけられるのを待っている「もの」は、実在しているといえるのでしょうか。」（31 ページ 16,17 ページ）といった疑問を投げかけ、その答えとしてソシュールの言語観を紹介している。

ソシュールの言語観は、名づけられることによって、はじめてものはその意味を確定するという考えを基本とし、ことばとは「ものの名前」ではないと見なす言語観である。伝統的な言語観の「名づけられるまえからすでにものはあった」という前提を覆し、命名される前の「名前をもたないもの」は実在しないと考えた点がソシュールの言語観の特徴だと言える。内田は、「羊」、“devilfish”、“several” の 3 つの具体例を挙げてソシュールの言語観の要点を整理しつつ、語が持つ意味の幅、すなわち「価値」はあることばと隣接する他のことばとの「差異」によって規定されると説明し、ことばよりも先に「もの」が存在するのではなく、「ことば」と「もの」は同時に誕生するという主張を展開している。

また、内田は、言語活動について言及する上で、星座の具体例を提示している。切れ目の入っていない混沌とした世界を、黒い空を背景にして散乱する無数の星に喩えたのである。無数の星と星のあいだに切れ目を入れて星と星を結ぶと「もののかたち」が見いだされるように、切れ目の入っていない混沌とした世界をことばによって分節することで「もの」の観念が私たち人間の思考の中に存在するようになるのであり、非定型的で星雲状の世界を切り分ける作業こそが言語活動であると述べている。

（4）構造主義とソシュールの思想

構造主義は、1950 年代から 1960 年代にかけてフランスを中心に広がった思想の総称である。構造主義の特徴は、可変的かつ表層的な諸現象の背後に隠された深層的で不変の〈構造〉を分析して記述することを目指した点に見いだされる。二項対立を基盤とする構造主義の立場によれば、文化現象はシステム内の要素間の関係、

他の要素との対立的な差異によってのみ意味を持つのであり、それ自体に本質的な意味が内在しているわけではない。

構造主義の共通の源泉になっているのは、言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの言語学である。ソシュールは、スイスの言語学者で「近代言語学の父」といわれる人物である。1906 年から 1911 年にかけてソシュールが行った講義の内容を弟子のシャルル・バイイとアルベール・セシュエがまとめた『一般言語学講義』は、構造主義言語学の礎だと言える。1940 年代に人類学者クロード・レヴィ＝ストロースがソシュール以降の言語学理論を背景として構造主義を用いて以来、哲学、文学、精神分析学、民族学、経済学、生物学など、主として人文・社会科学の領域で幅広く展開されている。フランスの構造主義を代表する思想家として、レヴィ＝ストロースのほかにロマン・ヤーコブソン、ジャック・ラカン、ロラン・バルト、ルイ・アルチュセール、ジャック・デリダなどが挙げられる。

ソシュールの言語観は、ソシュール自身が述べた「言語は、ネガティブな差異からなる体系である」という文言におおよそ集約されている。「ネガティブな差異」とは、「……ではない」という否定的な差異が言語記号を構成していることを意味する。例えば、「青」という色を理解するには、「青ではない」色を理解しなければならない。すなわち、「青である」色が何かを覚えるのではなく、「青」と「赤」、「青」と「白」、「青」と「黒」など「青」色と「青ではない」色の違いを把握することによって「青」が指示する意味を理解することができる。ソシュールは、「ことばは、ものの名前ではない」というところから出発し、ある言語システムの中で隣接する他の記号（言葉）との差異においての意味（価値）をもつと考えた。教科書本文にも登場する「羊」の例を挙げて、同じ対象を見ていても異なる言語をもつ人間は、それぞれが異なる形で世界を分節化するということを明らかにしたのである。

ソシュールは、言語活動の区分として〈ラング〉と〈パロール〉の二項対立を提唱した。〈ラング〉は言語の社会的側面、言語の一般法則や個々の発話を可能にする潜在的な規則体系のことである。語彙や文法など社会に共有されている言語上の約束事のことを指す。それに対して、〈パロール〉は言語の個人的側面、個々の言語や実際に話し手が発する具体的な言葉を意味する。ソシュールは、〈ラング〉を言語の共時的な構造を扱う共時言語学の研究対象とし、ラングが記号（シーニュ）の体系であると考えた。記号は記号表現（シニフィアン）と記号内容（シニフィエ）が結び付いたもので、さらには両者の結びつきが恣意的なものであるとソシュールは唱えている。

ソシュールの主張を大きく 3 点に分けて整理すると、次のようになる。

❶ラングは、シニフィアンとシニフィエが表裏一体に結びついた記号の体系であり、シニフィアンとシニフィエの結びつきは恣意的である。
❷言葉の意味は独立して定義することができず、あらゆる言葉が隣接する他の言葉との関係に依存する。
❸言語は、私たちの世界を構成している。

教科書本文では、以上に述べてきたソシュールの言語観が大きく取り上げられている。ソシュールは、後の構造主義に影響を与えただけでなく、現代の私たちの言語観を規定した人物といって差し支えないだろう。だが、こうしたソシュールの言語観が全く問題点や矛盾を抱えていないかと言えばそうではない。国広哲弥（2010）の「抽象的な記号の対立とは何ぞや…（中略）…具体的な知覚実質なしには差異は存在しえない」という指摘はその一つである。また、時枝誠記は、言語は主体の表現行為・理解行為の過程そのものであるとする言語過程説を提唱し、その中でソシュールのラング概念を批判している。重要なのは、伝統的な言語観とソシュールの言語観のどちらか一方が正しいわけではないということである。2 つの言語観に対する理解を深めて多角的に検討することを通して、生徒の既成の言語観に何かしらの変容が起こることを目指す。

７．単元観

（１）単元を通して育成したい・資質・能力

第一に、具体的な情報と一般化された情報との関係について理解する力である。「ことばとは何か」の文中には、具体例とそれに対応する抽象的な概念が多く見られる。例えば、30 ページ 1 行目から 31 ページ 11 行目までの第一段落では、伝統的な言語観とはどのような言語観なのかについて読者に分かりやすく伝えるために、『旧約聖書』に見られるアダムが野の獣に名前をつける記述や、日本語の「犬」が英語では“dog”、フランス語では“chien”、ドイツ語では“Hund”と呼ばれる例を提示している。ソシュールの言語観や言語活動について説明する段落においても、具体例を用いて自身の主張を述べる筆者の姿勢が見てとれる。具体例に着目しそれがどのような抽象的な考えを説明するために用いられているのかを生徒に読み取らせる活動を通して、個別の情報と一般化された情報とを適切に関係付ける力を身に付けさせると同時に、抽象化することで筆者の主張に近づくことができるということに気づかせたい。

第二に、自分の考えを伝えるのに必要な情報を様々な観点から収集・整理したり、話の構成や展開を工夫して自分の考えを的確に伝えたりする力である。第 3 時では、「ことばとは何か」の文章を読んで考えた「ことば」と「もの」の関係についてさらに理解を深めるために、ソシュールの言語観に関して情報を収集・整理し調べた内容について意見交流する。「ある語が持つ『価値』、つまり『意味の幅』は、その言語システムの中で、あることばと隣接する他のことばとの『差異』によって規定されます。」（33 ページ 15～17 行目）や「言語活動とはちょうど星座を見るように、もともとは切れ目の入っていない世界に人為的に切れ目を入れて、まとまりをつけることだ」（34 ページ 16～17 行目）などのソシュールの言語観を端的に述べた文言を足掛かりとして、ことばが世界を分節するとはどういうことかについて具体例を挙げて説明する活動を行う。調べた内容を整理・発表する際に PowerPoint を用いるが、収集した情報や考えたことのうちどれを記入するのか、どのような構成で情報を整理するのかなどを検討させて、他者に自分の考えを的確に伝える力を育成したい。

第三に、評論文という文章の種類を踏まえて、文章の内容や構成、主題などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握する力である。「ことばとは何か」は、ギリシャ以来の伝統的な言語観とソシュールの言語観を中心に取り上げて言語について述べた評論文である。論理的な文章と実用的な文章、そして文学的な文章とでは書かれる目的や表現方法などが異なっており、本教材を読むにあたっては、筆者の主張とそれを裏付ける根拠となる事実が書かれているなどの論理的な文章の特徴を捉えることが大切になる。評論文という文章の種類を踏まえた上で、叙述を基に文章の要旨や要点を把握する資質・能力を身に付けさせたい。

第四に、進んで文章を読み、伝統的な言語観やソシュールの言語観について批判的に検討して自身の言語観を問い直すことを通して、現代社会を生きる人間としての自覚をもち、ことばを通して他者や社会に関わろうとする力である。学習指導要領にも記されているように、現代社会は玉石混淆の情報が身の回りに溢れており、予測困難で複雑な社会だと言える。人間が言語を用いて思考したりコミュニケーションをとったりする社会的な生き物である以上、言語を現代の社会生活から切り離すことはできない。教材文を通して相反する 2 つの言語観に触れる本単元は、生徒が「ことば」と「もの」の関係に着目して自分がこれまで「普通」や「当たり前」だと思っていた既成の言語観を問い直すいい機会であり、こうした力を身に付けることは、これからの社会を主体的に生きていく上で欠かせないと考える。生徒が現代社会を生きる人間の一人であるという自覚を持ち、ことばを用いて他者や社会に関わろうとする態度を養いたい。

また、“metamorphose”は、形態・状態の変化や人間の動物などへの変身を意味するドイツ語である。昆虫や両生類などの生物が生育過程において姿や形を変えることを「変態」というが、これも“metamorphose”の一つだと言える。変態を遂げることで、生物は身体の物理的構造や消化器系・呼吸器系などの機能が著しく変化する。成虫をゴールとして生物が変態を繰り返すのは、環境に適応して生き延びるため、そして生殖能力を高めて子孫を残すためである。本単元で扱う教材「ことばとは何か」では、既に存在する事物に対して名前がつけられるというギリシャ以来の伝統的な言語観と、ことばによって分節されることでものの意味が確定すると

いうソシュールの言語観の 2 つの言語観が提示されている。本単元の学習以前から、日々の言語生活を通じて生徒一人ひとりの中には十人十色の言語観が形成されており、本単元において自分とは異なる言語観に触れることを通して既成の言語観に揺らぎが生じることが期待できる。単元名の「言語観の変容（メタモルフォーゼ）」には、生徒一人ひとりがもつ言語観が著しく変化したり深まったりすることを目指す授業者の指導観を込めている。

（2）学校図書館の活用

先述した通り、第 3 時では「ことば」と「もの」の関係について理解を深め、様々な観点から情報を収集・整理して調べた内容について意見交流する活動を行うために学校図書館を活用する。学校図書館は、生徒の読書活動や生徒への読書指導の場である「読書センター」としての機能のほか、生徒の学習活動を支援したり授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」、そして生徒や教職員の情報ニーズに対応したり生徒の情報収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」としての機能を有している。本単元では、学校図書館の「学習センター」及び「情報センター」としての機能に注目し、図書をはじめとする学校図書館メディアを利活用して生徒が主体的に情報を収集・整理する取り組みを実践する。この学習活動は教室に特集書架を設置して実施することも可能だが、学校図書館で行った方が各自の設定するテーマや収集する情報の自由度が高まることが予想される。また、“学校図書館＝貸本屋”といったイメージを抱いている生徒は少なくないだろう。そうした固定観念を覆し、授業時間や休み時間、部活動など様々な場面における学校図書館の利用を促進する観点からも、学校図書館を活用した授業を実施する意義は大きいと考える。

８．単元の指導計画と評価計画（３時間扱い）

時	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準（評価方法）
	○著者の内田樹について、紹介する。 【紹介する図書】 ❶『私家版・ユダヤ文化論』（文藝春秋　2006 年） ❷『レヴィナスと愛の現象学』（文藝春秋　2011 年） ❸『寝ながら学べる構造主義』（文藝春秋　2002 年）	・教師の読書歴を交えつつ、内田樹の著書を紹介することで、教材文に対する関心を高める。 ・教科書本文が『寝ながら学べる構造主義』の「ことばとは『ものの名前』ではない」の中に収められていることを紹介する。	【知識・技能】 具体的な個別の情報と一般的な情報との関係について理解するとともに、名づけることで事物がはじめて存在するという言語観について理解を深めている。（発言・行動観察）
1	○タイトル（ことばとは何か）の意味について考える。	・「ことばとは何か」について自由に考えさせることで、生徒一人ひとりが各自の問題意識をもって教材に出合えるようにする。	【思考・判断・表現】 評論文という文章の種類を踏まえて、文章の内容や構成、主題などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。（行動観察）
	○本文を黙読して、文章の構成を把握する。 ・全体を意味段落に分けるとどうなるかについて考えて、教科書にメモする。	・意味段落に分けることで、伝統的な言語観とそれに対する問題提起、問いの答えとしてのソシュールの言語観で文章が構成されていることを掴ませる。	

	○ギリシャ以来の伝統的な言語観について理解する。 ○伝統的な言語観に対する筆者の問題提起を探す。	・具体例から抽象的な考えを読み取らせる活動を通して、抽象化することで一般化された情報が得られることを理解させる。 ・第一段で紹介された伝統的な言語観に対する筆者の立場を確認し、第 2 時では筆者の答えを確認することを伝える。	
2	○伝統的な言語観への問題提起に対する筆者の答え（結論）を探す。 ○ソシュールの言語観について伝統的な言語観との違いを意識しながら理解する。 ○「同じこと」（32 ページ 14 行目）は、何と何がどのような点が同じなのかについて考える。 ○「星座」の具体例（34 ページ 8 行目～35 ページ 7 行目）が、どのような抽象的な考えを説明しているかについて考える。	・前時の振り返りとして、第二段（31 ページ 12 行目～31 ページ 17 行目）において伝統的な言語観に対する問題提起がなされていたことを確認する。 ・前時と同じく、具体例とともに具体例が説明している抽象的な考えについて理解できるように指導する。 ・「同じこと」が意味する内容について考えさせることで、世界をどのように切り分けるかが名づけることと深い関係にあることに気づかせる。 ・言語活動とは、世界に切れ目を入れてある観念を思考の中に存在させることであること、すなわち言語活動によって世界が切り分けられて「もの」が存在するようになることを理解させる。 ・次回の授業を学校図書館で行うこと、図書館に特設コーナーが設けられていること、PC を持参する旨を指示する。	【知識・技能】 具体的な個別の情報と一般的な情報との関係について理解するとともに、名づけることで事物がはじめて存在するという言語観について理解を深めている。（発言・行動観察）
	○伝統的な言語観とソシュールの言語観について復習する。 ○学習の見通しを持つ。 ・虹の具体例による教師の説明を聞いて、活動の手順を把握する。	・成果物の例を紹介したり活動の手順を説明したりする際に、モニターを使用する。	【思考・判断・表現】 自分の考えを伝えるために必要な情報を様々な観点から収集・整理するとともに、話の構成や展開を工夫して自分の考えを的確に伝えている。

			（PowerPoint，行動観察）
	○「ことばが世界を分節する」とはどういうことか、具体例を挙げて説明する。 ・具体例を思い浮かべて、それについて考えたり収集したりした内容を PowerPoint に整理する。	・生徒の思考の深化を促すツールとして、特集書架（ブックトラック）を閲覧席の中央に設置する。 ・教師の iPad のタイマー機能を用いて残り時間を生徒に明示する。	【主体的に学習に取り組む態度】 進んで文章を読み、伝統的な言語観やソシュールの言語観について批判的に検討して自身の言語観を問い直すことを通して、現代社会を生きる人間としての自覚をもち、ことばを通して他者や社会に関わろうとしている。 （Google Forms，行動観察）
3	○PowerPoint を用いて、班ごとに意見を交流する。 ○Google Classroom に各自が作成した PowerPoint のスライドをアップロードする。 ○単元を通して自身の言語観が変容したか、振り返る。	・意見交流の仕方を大きくモニターに表示する。 ・Google Classroom の操作方法に関しては、指導教員の若宮先生と協力して生徒の支援を行う。 ・振り返りとして、Google Forms を提出させる。	

９　本時の学習（１／３時）

（１）本時の目標

叙述をもとに文章の内容や構成を把握するとともに、具体例に込められた抽象的な考えを読み取る活動を通して伝統的な言語観について理解することができる。

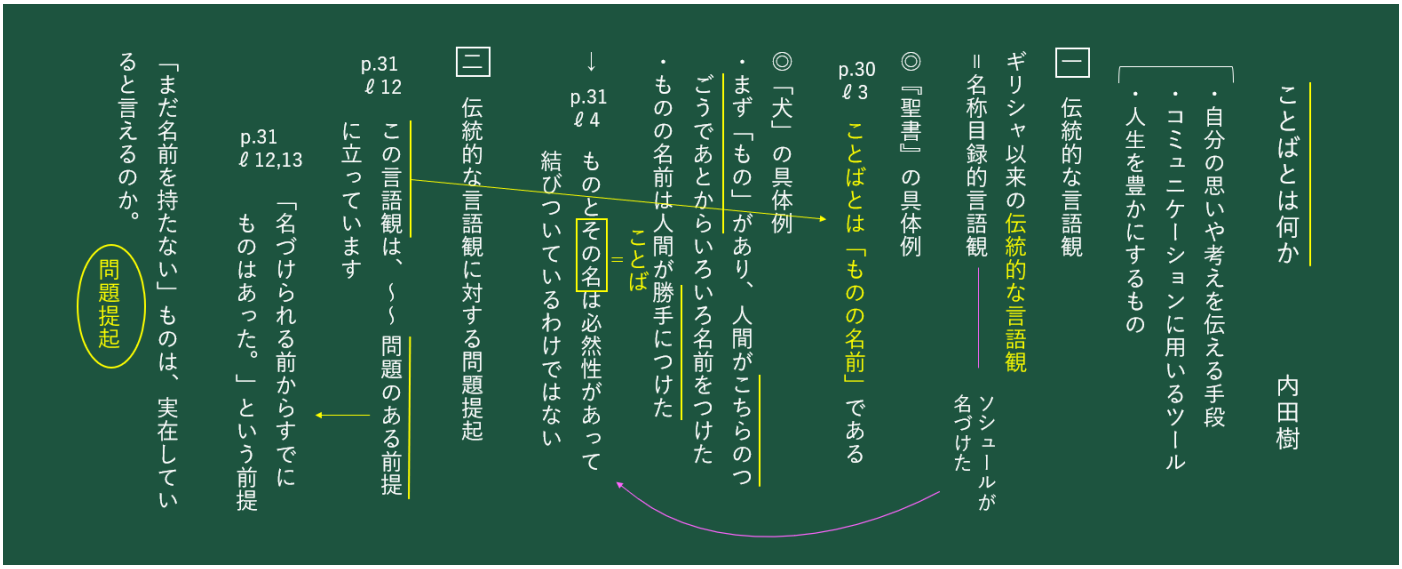
（２）本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（評価方法）
導入 15 分	○著者の内田樹について、紹介する。 【紹介する図書】 ❶『私家版・ユダヤ文化論』 （文藝春秋　2006 年） ❷『レヴィナスと愛の現象学』 （文藝春秋　2011 年） ❸『寝ながら学べる構造主義』 （文藝春秋　2002 年） ○タイトル（ことばとは何か）の意味について考える。	・生徒との距離感を縮めるため、1 分程度で自己紹介を行う。 ・教師の読書歴を交えつつ、内田樹の著書を紹介することで、教材文に対する関心を高める。 ・教室後方の生徒に配慮して事前に作成した PowerPoint のスライドを提示して、紹介する図書のタイトルと書影を見やすくする。 ・教科書本文が『寝ながら学べる構造主義』のの中に収められていることを紹介する。 ・「ことばとは何か」について自由に考えさせることで、生徒	

	T「タイトルの“ことばとは何か”について自分の考えを書きましょう」 S「ことばは自分の思いや考えを伝える手段の一つである」 S「ことばは会話やコミュニケーションに用いるツールだ」 S「ことばは個性を表現するものだ」	一人ひとりが各自の問題意識をもって教材に出合えるようにする。 ・数名の生徒を指名し、「ことばとは何か」について生徒が発言したことを板書する。挙手した生徒全員に発言させることが望ましいが、時間配分には十分注意する。 ・発表する生徒の意見をもとに、タイトルについて生徒がより深く考えられるように指導する。	
展開 25 分	○本文を黙読（5 分間）して、文章の構成を把握する。 ・形式段落の番号を振った上で、全体を意味段落に分けるとどうなるかについて考えて、教科書にメモする。 ○ギリシャ以来の伝統的な言語観について理解する。 T「伝統的な言語観を紹介している第一段には、『旧約聖書』と「犬」の 2 つの具体例が見られます。」 T「『旧約聖書』の『創世記』に見られる具体例は、伝統的な言語観がどのような考えであることを説明していますか」 ・伝統的な言語観は、「ことばとは『ものの名前』である」という言語観であることを理解する。 T「31 ページの「犬」の具体例は、伝統的な言語観のどのような特徴を説明していますか」 ・伝統的な言語観は、「ものの名前は人間が勝手につけた」という考えが基	・意味段落に分けられた生徒には、それぞれの意味段落が何を表しているかを書かせる。 ・意味段落に分けることで、伝統的な言語観とそれに対する問題提起、ソシュールの言語観を中心に文章が構成されていることを掴ませる。 ・本文が具体例とそれが説明する抽象的な考えを軸に構成されていることを明示する。 ・「伝統的な言語観」と同じ意味で「名称目録的言語観」や「カタログ言語観」という語が用いられていることを確認する。 ・ソシュールの名づけにより、ものとその名前には必然的な結びつきがないことが分かることを説明する。 ・具体例から抽象的な考えを読み取らせる活動を通して、抽象化することで一般化された情報が得られることを理解させる。	【思考・判断・表現】 評論文という文章の種類を踏まえて、文章の内容や構成、主題などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。（発言・行動観察）

	本にあることを捉える。		
まとめ 10 分	○伝統的な言語観に対する筆者の問題提起を探す。 T「教科書 31 ページ 12～13 行目には、『この言語観は、いささか問題のある前提に立っています』と書かれています。『この言語観』とは何を指しているでしょうか？　その『前提』とはどういうものでしょうか」 T「筆者は、伝統的な言語観に対してどのような問題があると主張していますか」 ・「名づけられる前からすでにものはあった」という伝統的な言語観の前提には問題があるとし、筆者が「まだ名前を…（略）…と言えるのでしょうか」（31 ページ 16～17 行目）で問題提起していることを把握する。	・発問を細分化して、スモールステップで生徒が理解できるように心がける。 ・第一段で紹介された伝統的な言語観に対する筆者の立場を確認し、第 2 時では筆者の答えを確認することを伝える。	【知識・技能】 具体的な個別の情報と一般的な情報との関係について理解するとともに、名づけることで事物がはじめて存在するという言語観について理解を深めている。 （発言・行動観察）

（３）板書計画



１０　本時の学習（２／３時）

（１）本時の目標

複数の具体例から共通する特性を取り出して筆者の主張を捉える活動を通して、伝統的な言語観との相違点を意識しながらソシュールの言語観について理解を深めることができる。

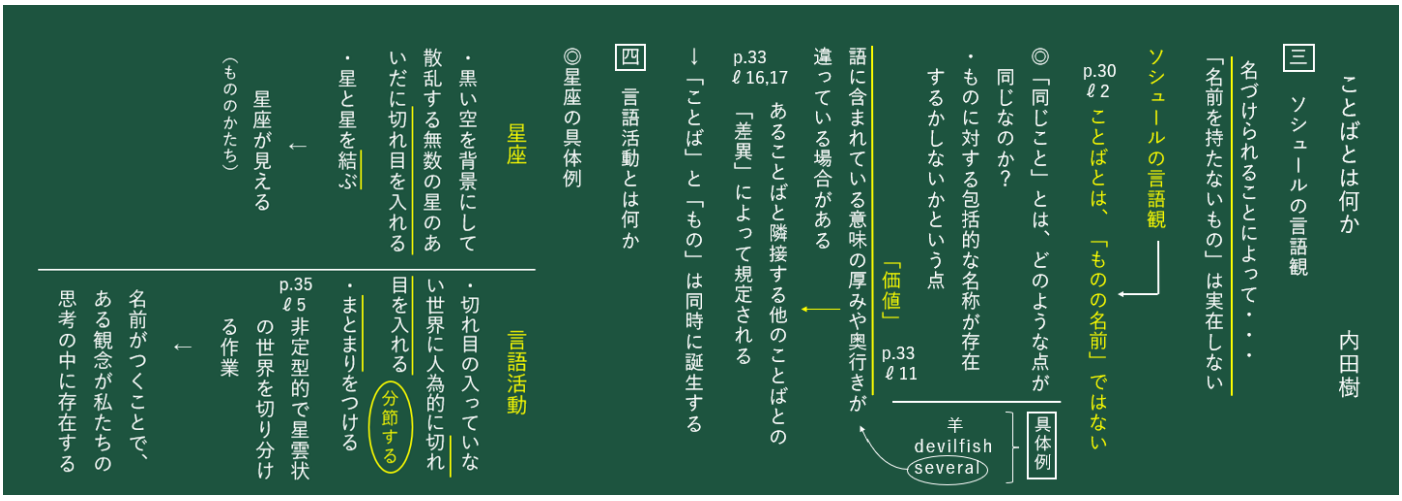
（２）本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（評価方法）
	○伝統的な言語観への問題提起に対する筆者の答え（主張）を探す。	・前時の振り返りとして、第二段（31 ページ 12 行目～17 行目）	

導入 8 分	T「前回の授業の最後で、伝統的な言語観に対して筆者が問題提起していることを確認しました。この問題に対して、筆者はどのように答えているでしょうか」 ・「名づけられることによって…（略）…そう考えました」（32 ページ 1～3 行目）が筆者の答えとして適切であることを理解する。	において伝統的な言語観に対する問題提起がなされていたことを確認する。 ・結論を探させる際、問題の答えとして最も適切な一文を指摘するよう指示する。	
展開 30 分	○ソシュールの言語観について伝統的な言語観との違いを意識しながら理解する。 T「第三段は、ソシュールの言語観について説明している段落です。これまで確認してきた伝統的な言語観とは明確に異なっています」 T「ソシュールの言語観を説明するにあたって多くの具体例が挙げられていますが、どのような具体例があるか見つけられますか」 ・第三段（31 ページ 1 行目～34 ページ 3 行目）で、ソシュールの言語観を説明するために、羊や devilfish、several などの具体例が紹介されていることを確認する。 ○「同じこと」（32 ページ 14 行目）とは何が何とどのような点で同じなのかについて考える。 T「教科書 32 ページ 14 行目には、『日本語と英語の場合でも同じことが起こります』と書かれていますが、何が何とどのような点で同じなのでしょうか」 S「ものに対する包括的な名称が存在するかしないかという違いがある点」 S「devilfish の例が羊の例と同じであることを説明している」 T「several の具体例は、同じような意味を持つ語であっても、意味の厚みや奥行きが微妙に異なる場合があることを説明する例として挙げられ	・前時と同じく、具体例とともに具体例が説明している抽象的な概念についても考えるよう指導する。 ・ソシュールの言語観が伝統的な言語観とは異なってることに生徒自らが気づくことができるように指導する。 ・「同じこと」について考えさせることで、世界をどのように切り分けるかが名づけることと深い関係にあることに気づかせる。 →第 3 時の学習活動に関わる重要な気づきの視点 ・具体例が意味する内容について考えさせることを通して、ソシュールの言語観に対して生徒が理解を深められるように指導する。	【知識・技能】 具体的な個別の情報と一般的な情報との関係について理解するとともに、名づけることで事物がはじめて存在するという言語観について理解を深めている。 （発言・行動観察）

	ています」 ・「語に含まれている意味の厚みや奥行き」が「価値」であり、語の「価値」はあることばと隣接する他のことばとの「差異」によって規定されること、「ことば」と「もの」が同時に誕生するということを把握する。		
まとめ 12 分	○「星座」の具体例（34 ページ 8 行目～35 ページ 7 行目）が、どのような抽象的な考えを説明しているかについて考える。 T「教科書 34 ページには、星座の具体例があります。これは、どのようなことを説明していますか」 S「黒い空を背景にして散乱する無数の星と星のあいだに切れ目を入れるように、言語活動によって切れ目を入れてまとまりをつけることで、世界を理解している（ある観念が思考の中に存在するようになる）」 ・「黒い空を背景にして散乱する無数の星」（34 ページ 10～11 行目）は、言語活動における切れ目のない混沌とした世界を意味している。 ・星座は、無数の星のあいだに切れ目を入れて星と星を結ぶことで見える「もののかたち」である。	・言語活動とは、世界に切れ目を入れてある観念を思考の中に存在させることであること、すなわち言語活動によって世界が切り分けられて「もの」が存在するようになることを理解させる。 ・第四段（34 ページ 3 行目～35 ページ 7 行目）が、タイトル（ことばとは何か）や冒頭の一文と照応していることを掴ませる。 ・時間があれば、言語を取り上げた最近の話題書として、今井むつみ・秋田喜美 著『言語の本質　ことばは生まれ、どう進化したのか』を紹介する。 ・次回の授業を学校図書館で行うこと、図書館入り口に本授業のコーナーが設置されていること、次回の授業で PC を持参する旨を指示する。	

（3）板書計画



１１　本時の学習（３／３時）

（1）本時の目標

ことばが世界を分節するとはどういうことかについて考えたことや収集した情報を整理してその成果を交流する活動を通して、ソシュールの言語観に対する理解を深めるとともに、自身の既成の言語観を問い直すことができる。

（2）本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（評価方法）
導入 10 分	○伝統的な言語観とソシュールの言語観について復習する。 ・内田樹の「ことばとは何か」では、まず「もの」があってそれに名前がつけられるという伝統的な言語観と、名づけられることによってものは初めてその意味を確定するというソシュールの言語観の 2 つが紹介されていたことを思い出す。 T「ソシュールは、言語活動とはどのような作業だと考えていましたか」 S「もともとは切れ目の入っていない世界に人為的に切れ目を入れて、まとまりをつけること」 S「非定型的で星雲状の世界を切り分ける作業」 ○学習の見通しを持つ。 T「教科書 33 ページ 15 行目に書かれているように、ソシュールはある語が持つ『価値』、つまり『意味の幅』は、その言語システムの中で、あることばと隣接する他のことばとの『差異』によって規定されると考えました。これは、言語ごとに世界の切り分け方、すなわち分節の仕方が異なると言い換えることができます」 T「今日は、ことばが世界を分節するとはどういうことかについて具体例を挙げて班ごとに意見交流してもらいます。今から活動の手順を説明するので、モニターを見てください」 ・虹の色を具体例として挙げた教師の説明を聞いて、活動の見通しを持つ。	・授業担当者・指導教員・司書で授業計画について事前に情報共有する。 ・事前に作成した座席表に従って、図書館に来た生徒たちを速やかに着席させる。 ・本時の学習への接続に鑑みて、「言語活動」及び「分節する」という概念を確認しておく。 ・本時の学習に関連する教材文の箇所を確認することにより、「ことばが世界を分節する」ということを生徒が理解できるように促す。 ・虹の色の数が言語ごとに異なる例を紹介することで、ものが先に存在するのではなく、言語が世界を形作っている、すなわち言語を通して世界の認識の仕方が規定されているという考えを理解させる。 ・学習活動の成果物の例を紹介したり活動の手順を説明したりするにあたって、学校図書館に設置されているモニターを使用する。	

展開① 25 分	○ことばが世界を分節するとはどういうことか、具体例を挙げて説明する。 ・ことばが世界を分節するということについて説明するのに適した具体例を思い浮かべる。 【想定される具体例】 ①雪を表すことば （フィンランド語、エスキモー） ②時計を表すことば （“watch”“clock”⇔「時計」） ③一人称単数を表すことば （“I”⇔「わたし」「ぼく」「うち」等） ④兄弟姉妹を表すことば （“brother”⇔「兄」「弟」） （“sister”⇔「姉」「妹」） ・必要があれば具体例に関する情報を学校図書館の資料やインターネットを用いて収集した上で、自分の考えを PowerPoint にまとめる。 ・PowerPoint に整理した自分の意見を的確に伝えるにはどうするべきか、考える。	・この後班のメンバーに向けて作成した PowerPoint を用いて発表する旨を予め生徒に伝えておく。 ・教師の iPad のタイマー機能を用いて、残り時間を生徒に明示する。 ・生徒が活動に取り組みやすいよう、活動の手順を大きくモニターに表示する。 ・生徒の思考の深化を促すツールとして、特集書架（ブックトラック）を閲覧席の中央に設置する。生徒が図書への関心を示さなかった場合は、各テーブルに 3 冊ずつ分配して利用を促す。 ・具体例が思いつかない生徒には、個別に声をかけて教師との対話を通じて具体例が思い浮かぶよう支援する。 ・PC を忘れた生徒に対する救済措置として、B5 サイズの白紙を用意しておく。	【思考・判断・表現】 自分の考えを伝えるために必要な情報を様々な観点から収集・整理するとともに、自分の考えを的確に伝えている。（PowerPoint）
展開② 10 分	○PowerPoint を用いて、班ごとに学習課題について意見を交流する。 ・PowerPoint の画面を見せながら、1 人ずつ自分の考えを発表する。 ・1 人あたりの持ち時間の目安：約 2 分 ○Google Classroom に各自が作成した PowerPoint のスライドを PDF 化してアップロードする。	・班ごとの意見交流が深まるよう、意見交流の仕方を大良くモニターに表示する。 ・机間指導を行い、班ごとの意見交流の進捗状況を把握する。 ・Google Classroom への提出方法に関しては、指導教員の若宮先生と協力して指導する。	【思考・判断・表現】 自分の考えを伝えるために必要な情報を様々な観点から収集・整理するとともに、自分の考えを的確に伝えている。（PowerPoint, 行動観察）
まとめ 5 分	○単元を通して自身の既成の言語観が変容したか、振り返る。 ・第 1 時の導入でノートに書いたタイトル（ことばとは何か）に対する自分の考えを見返す。 T「皆さんには、1 時間目にタイトル（ことばとは何か）の意味について考えてもらいました。当初からユニークな意見を挙げている人が多かったで	・第 1,2 時で文章を読んで、相反する 2 つの言語観に触れたことを改めて確認する。 ・生徒の既成の言語観が変容したかどうか振り返って、Google Forms を提出する。 ・時間があれば、今井むつみ・秋田喜美（2023）『言語の本質	【主体的に学習に取り組む態度】 進んで文章を読み、伝統的な言語観やソシュールの言語観について批判的に検討して自身の言語観を問い直すことを通して、現代社会を生きる人間としての

	すが、授業を受ける前と後で自分自身の言語観、ことばに対する見方・考え方は変わりましたか？」 ・自分の既成の言語観を見つめ直し、言語観が変容したかを振り返る。	ことばはどう生まれ、進化したか』中央公論新社. を言語に関する話題の新書として紹介する。	自覚をもち、ことばを通して他者や社会に関わろうとしている。 （Google Forms, 行動観察）

（３）板書計画

学校図書館を活用して活動を行う授業のため、板書は使用しない。

《参考文献》

・丸山圭三郎（1981）『ソシュールの思想』岩波書店.
・フランソワーズ・ガデ著，立川健二訳（1995）『ソシュール言語学入門』新曜社.
・樺島忠夫（1981）『日本語はどう変わるか―語彙と文学―』岩波書店.
・西田谷洋（2014）『学びのエクササイズ 文学理論』ひつじ書房.
・ピーター・バリー著，髙橋和久訳（2014）『文学理論講義―新しいスタンダード―』ミネルヴァ書房.
・武田悠一（2017）『読むことの可能性―文学理論への招待―』彩流社.
・国広哲弥（2010）「語の意味をめぐって」澤田治美編『ひつじ意味論講座』第 1 巻，ひつじ書房.
・時枝誠記（2007）『国語学原論　上』岩波書店.